

第8章 学生生活と学生支援

第1節 学生生活と学生支援

第1項 学生生活

1997年から2022年までの25年間における学部学生数については、12,105名から10,338名に減少しており、国際教養学部創設（2016年）など、学部ごとの変動もあったが、毎年全国からおおよそ2,500名の新入生を迎え、約10,000名の学部学生がともに学び、お互いに刺激し合っている。2022年度の入学者から学生の出身地の割合をみると、関東地区が約7割、その他の地域が約3割で構成されている（表1-8-1-1）。男女の割合としては、男子57.9%、女子42.1%であり、新卒・既卒の割合は新卒80.8%、既卒18.7%となっている（2022年度入学生）。

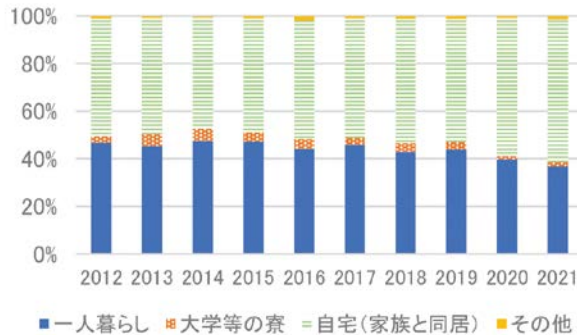
千葉大学学生生活支援委員会・千葉大学学生支援機構学生相談企画室が2004年、2006年及び2008年にまとめた学生生活実態調査報告書によると、学生の出身地は北海道地区1.2%、東北地区8.8%、関東地区64.4%（千葉 29.2%、東京 12.4%）、中部地区14.8%、近畿地区2.4%、中国・四国地区4.3%、九州地区3.6%、その他0.1%と2022年度入学生と比較しても大きな変化はなく、全国から学生が入学している。学生の住居形態については、アカデミック・リンク・センターが2012年から毎年実施している「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」「あなたの居住形態」の

表1-8-1-1 2022年度入学者にみる学生の出身地域

	入学者数	割合	
北海道地区	53	2.2	
東北地区	132	5.6	
関東地区	1,612	68.4	
	(千葉)	753	32.0)
	(東京)	427	18.1)
中部地区	337	14.3	
近畿地区	82	3.5	
中国・四国地区	58	2.5	
九州・沖縄地区	69	2.9	
その他	13	0.6	
計	2,356		

項目にまとめられている。この報告によると、2010年代前半「自宅」と回答していた学生は40%台後半を推移していたが、2017年には50%を超え、コロナウイルス感染拡大の影響も受け、2021年報告では60%と自宅から通学する学生が増える傾向

図1-8-1-1 学生の住居形態



がみられる (図1-8-1-1)。学生生活実態調査報告書における「生活状況について」「住宅の形態」の項目をみると、「自宅」と回答した割合は、2004年37.8%、2006年36.4%、2008年39.5%と40%以下であり、この20年間で自宅から通学する学生が増えている傾向がみられる。学生の通学手段については、2004年～2008年の学生生活実態調査で報告されている。通学方法は、「自転車」が最も多く53.8% (2004、2006、2008年平均)、ついで電車・モノレール37.8%、徒歩4.5%という順であった (図1-8-1-2)。通学時間については、同調査で15分未満が49.6%、ついで1時間30分以上の13.1%であった (図1-8-1-3)。2013年～2019年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」にも「通学等の移動時間に1日平均どれくらい時間を費やしていますか」という類似した調査項目がある。この調査による回答は、通学については往復時間が含まれていると考えられるため、調査結果を1/2にして比較をしてみると、15分未満 (47.8%)、15分～ (14.7%)、1時間～ (17.1%)、1時間30分～ (19.2%) という割合になる。これによると、1時間30分～の割合が増えており、自宅から通学する学生が増えている要因でもある

図1-8-1-2 通学方法

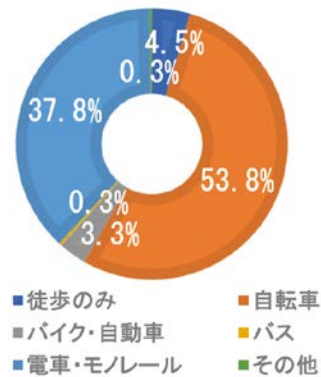
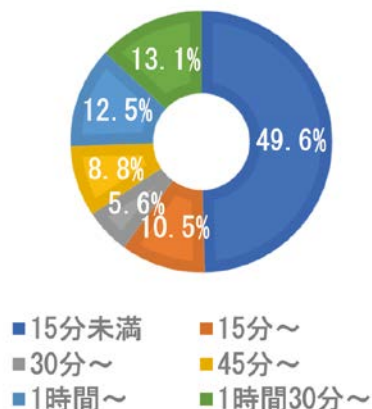


図1-8-1-3 通学時間



1時間～ (17.1%)、1時間30分～ (19.2%) という割合になる。これによると、1時間30分～の割合が増えており、自宅から通学する学生が増えている要因でもある

とも考えられる。通学時間についても新型コロナウイルス感染拡大による影響は大きく、2020年度の「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の調査における通学時間は30分未満が69.3%（0時間46.1%、30分程度23.2%）と例年より大幅に増加していた。

「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」「授業学期中に週に何日くらい大学にいますか」から学生が1週間に大学にいる日数をみると、週に5日大学に来る学生が50%程度と最も多い割合を示していたが、2020年は0日と1日を合わせて72.0%とコロナ感染対策によるオンライン授業等で大きく様変わりした年となった。2021年においては、2日、3日が20%台とキャンパスに学生が少しずつ戻ってきたが、0日、1日を合わせると10%を超え、新型コロナウイルス感染拡大の影響が続いているのが分かる（図1-8-1-4）。また、1日にキャンパスにいる時間についても調査が行われており、同調査報告より2012年から2019年は「6時間から12時間未満」が50%以上と最も多い結果を示した。2004年～2008年の調査では、40%前後であり、キャンパスに長くいる学生が増える傾向にあったことを示している。しかし、これも新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年7.1%、2021年20.9%と減少している。

学生が「ふだん授業期間中に勉強する時間が長い場所」に関する調査では、「大学内の施設」が最も多く54.5%（2012年～2019年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」平均）、ついで自宅（40.3%）、大学外の施設（5.3%）という結果であり、年度による大きな変化はみられなかった（図1-8-1-5）。同調査で、「大学内で勉強するときに、主に、利用する施設」については、やはり、図書館が最も多く、2012年～2019年の平均が87.6%と約9割の学生が図書館を利用していた。「大学外の施設」については、「ファミリーレストラン・ファストフード店の店舗」が34.9%（2012年～2019年平均）、公共図書館が21.9%、友人の家が8.9%

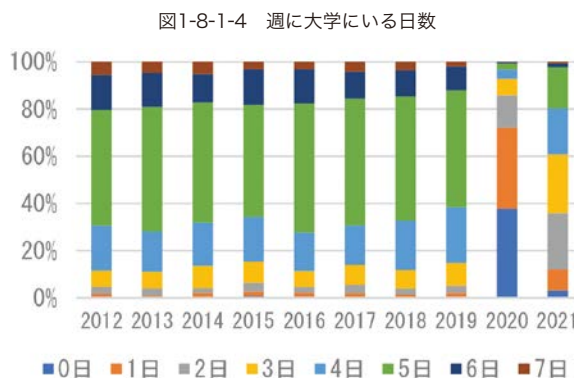
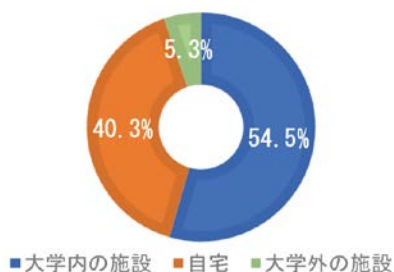


図1-8-1-5 大学内で勉強する時間が長い場所



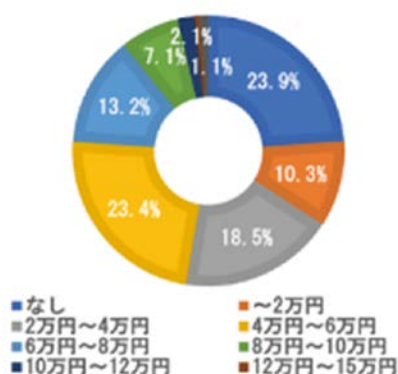
という結果であった。

学生の授業に対する態度、出席状況、満足度について、2012年～2019年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」「学生の授業に対するスタンス」に関する項目で、2012年～2019年は7割の学生が「すべての授業に同じように出席」と回答していたが、2020年、2021年は86%の学生が「すべての授業に同じように出席」と回答しており、コロナ感染対策によりオンライン授業等が行われたことから、学生の授業に対する意識が変化したことがうかがえる。実際に「どれくらい授業に出席していますか」の質問項目の回答についても、2015年～2019年は6割の学生が「10割出席」、2020年、2021年は75%の学生が「10割出席」と1割以上増加している。満足度について、「千葉大学の教育・授業」については、2004年～2008年の学生生活実態調査、2015年～2019年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」ともに、満足傾向を示す学生が75%程度とおおよそ同様の結果を示した。「学習環境」についても75%程度が満足という結果であった。「学習支援・学習相談」については、満足傾向を示す学生が65%程度という結果であった。学生の悩み、相談に関する調査も行われている。悩みについては、授業、友人関係を含む学生生活、健康、就職に関することと多岐にわたることが示されているが、教職員に相談したり、アドバイスを求めたり話す機会に関する調査では4割以上の学生が教職員と話をしたり、相談したことがないと回答している。また、2004年～2008年の学生生活実態調査では、千葉大学に学生相談窓口があること、相談員がいることを知っている学生が5割程度と約半数程度であった。この調査では、ハラスメントに関する調査も行われており、2004年～2008年の3回の調査で6%程度の学生がハラスメントを経験し、その対応としては、我慢したが41.1%、友人、先輩に相談したが22.4%、その場で抗議したが17.4%という割合を示していた。学習支援・生活・健康等に関する相談についてはまだ課題が多いことがこれらの調査結果からみてとれる。

学生の経済状況に関する調査も2004年～2008年の学生生活実態調査において行われている。この中で学生の生活に関する収入に関する項目としては、アルバイトの収入に関するものがある。アルバイトをしていない学生も2割以上みられるが、1ヶ月のアルバイトでの収入として最も多い金額は4万円～6万円の範囲であった（図1-8-1-6）。2021年に千葉大学生生活協同組合（生協まるごとアンケート）が実施した調査では、ひと月のアルバイト収入の最も割合が高かった金額は2万円～4万円が31.7%、ついで、4万円～6万円（28.9%）であった。また、日本学生支援機構が2020年に行った調査では、全国の国立大学学生のアルバイトの金額は年328,800円（27,400

円／月)であり、全国平均よりもやや高い傾向がうかがえる(令和2年度学生生活調査・高等専門学校学生生活調査・専修学校学生生活調査)。アルバイトの内容としては、2004年～2008年の学生生活実態調査、2021年生協まるごとアンケート結果ともに、塾・家庭教師が最も多く、次いで、レストラン・売店等のウェイト、販売員が続いていた。これに対して支出については、家賃に関する項目が2004年～2008年の学生生活実態調査、日本学生支援機構令和2年度学生生活調査、2021年生協まるごとアンケートともにみられる。2004年～2008年の学生生活実態調査では、割合として5万円台が最も多く、2021年生協まるごとアンケートの結果においても5万円～5万5千円が最も割合が多い傾向を示した。日本学生支援機構令和2年度学生生活調査の全国のアパート等の平均としては、41,475円となっており、この20年で大きな変化はみられず、全国的な平均よりもやや高くなる傾向がうかがえる。

図1-8-1-6 1ヶ月のアルバイト収入



第2項 学生支援

学生支援センター

「学生支援センター」は、高等教育研究機構学生支援部門を前身とし、国際未来教育基幹キャビネットに置かれる組織として2016年度に発足した。本センターには生活・経済支援部、勧誘行為対応部、障害者支援部、課外活動支援部、ピアサポート



写真1-8-1-1 総合学生支援センター棟

部、キャリアサポート部及び学生相談支援部が置かれ、それぞれ学生生活、学生相談、キャリア形成、就職等に係る支援方法の企画・立案・実施及び改善・充実に係る業務を行っている。

a. 生活・経済支援部

入学科・授業料免除に係る審査・制度運営や学寮の入寮者選考等、学生生活の充実に資する業務を行っている。

b. 勧誘行為対応部

勧誘問題に関する業務を行っている。学生が、一般のサークル活動や勉強会などと装ったカルト団体等の勧誘を受ける等のトラブルに巻き込まれることがあるため、啓発活動を行うとともに、各種相談を受け、警察機関等と連携・情報共有しながら対応している。

新入生ガイダンス等において、勧誘行為に関する手口などを紹介するとともに、ポスターの作成・掲示等により注意喚起を行っている（図1-8-1-7）。

c. 障害者支援部

障害学生の修学に関する支援を行っている。後述する「ノートテイク会」「チャレンジド・サポートのみり」の活動を所掌している。

d. 課外活動支援部

課外活動団体及びその活動を所掌しており、団体・活動の審査、表彰団体の選定、サークル・リーダーシップトレーニングの開催（後述）等、広く課外活動団体に関する業務を行っている。

e. ピアサポート部

学生の修学支援に関する業務を行っている。後述する「ふれあいの環」団体による各種ピアサポート（学生による学生支援）活動を所掌している。

図1-8-1-7 カルト勧誘注意喚起ポスター



f. キャリアサポート部

学生のキャリア形成及び就職の支援に関する業務を行っている。学生の主体的な進路選択のためのキャリアサポートとして、就職活動の基本ガイダンス、インターンシップガイダンス、面接対策や業界・企業研究セミナーをはじめとして、公務員試験対策講座、OB・OGによる企業説明会など幅広い内容で多数の就職ガイダンスを企画・実施している。また、個別の学生の就職に係る様々な相談に応じるため、キャリアアドバイザーとして非常勤講師3名（西千葉地区2名、松戸地区1名）を雇用している。第3、第6タームを除き、西千葉地区では毎日、松戸地区では週2日就職相談を実施しており、就職活動とは何から始めればよいのかという基本的な相談からエントリーシートへの添削、模擬面接など一人一人の悩みや課題に、きめ細かなサービスを提供している。新卒応援ハローワークの相談員が週1日（一部期間を除く）学内にて出張相談を行っており、就職相談において他機関との連携も行っている。

2020年以降は、新型コロナウイルス感染拡大に対応するため、就職ガイダンス及び就職相談において、従来の対面実施からオンライン実施が導入された。就職ガイダンスはオンライン実施が中心となり、就職相談は対面及びオンライン双方の実施となったことにより、学生の利便性が増し、どのキャンパスの学生も広く就職支援が受けやすい環境がさらに整うことになった。

g. 学生相談支援部

2022年度までは学生支援センターに学生相談室及び健康相談部が置かれ、学生相談室においてはカウンセラー（臨床心理士等）が、修学・就職・人間関係をはじめとする学生生活に関する相談対応を、健康相談部においては、総合安全衛生管理機構の医師等が健康に関する相談対応を行っていた。

2023年度からは総合安全衛生管理機構内に相談支援部を設置し、同部において健康に関する相談を含む学生相談及びケア等を一体的に行うことにより、支援体制を強化した。学生支援センターの学生相談支援部においては、引き続き学生相談室（相談支援部）と連携して学生相談に関する支援策の検討や情報共有を行い、修学環境の改善を図っている。

第3項 ふれあいの環（学生による学生支援）

2007年度に文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に本学の「双方向の多様な場づくりによる学生総合支援—ふれあいの環の多面的展開を通しての「総合的人間力」の涵養—」が採択された。これを契機に、教職員、学生、卒業生、地域住民が協同して多面的な活動を実践できる場として、2009年4月に「ふれあいの環」学生総合支援センターを創設した。開設当初、セン

図1-8-1-8 ふれあいの環 各団体ロゴマーク



ター内に創設した学生による学生支援活動（ピアサポート）団体は5団体（キャリア支援を行う「career port」、学生による学生相談を行う「ピア・カウンセラー」、ボランティアの紹介等を行う「ボランティア・コーディネーター」、留学生支援を行う「CISG」、聴覚障害学生の支援を行う「千葉大学ノートテイク会」）であり、学生総合支援センターには、2名のスタッフを配置し、教職員・学生と定期的に連絡会議を行うようになった。2018年度からは身体に障害を持ち、車椅子等を利用する学生をサポートする「チャレンジド・サポートのみり」が加わり、6団体で活動を継続している。また、この頃から各団体の名称を「学生ボランティア団体 C-vol（シーボル）」、「学生コミュニティ支援団体 GCAP（ジーキャップ）」、「チャレンジド・サポートのみり」、「ノートテイク会」、「学生キャリア支援団体 career port（キャリア ポート）」、「CISG（シーアイエスジー）—国際学生会—」とし、各団体のロゴマークも学生によって作成された（図1-8-1-8）。

各団体は年間を通してそれぞれ活動しているが、ふれあいの環6団体合同で行っている活動としては、ボランティアツアーの企画・運営や、福島県富岡町立富岡小・中学校との交流活動などがある。2011年3月11日の東日本大震災による被災者支援（被災地域におけるボランティア活動等）を支援するため、「千葉大学ボランティア活動支援センター」が設置され、2012年3月までの1年間に1,122件の学生、教職員に

よるボランティア活動が行われた（写真1-8-1-2）。

その後も震災ボランティアは継続して行われたが、特に福島県の太平洋側に位置し、福島第一原発事故の影響で町内全域が警戒区域に指定された富岡町立富岡第一、第二小学校（現富岡小学校）におけるボランティアは継続して行われた。この小学校は当時の学校長が本学教育学部卒業生であったことから、福島県三春町に仮校舎が設置された三春校に千葉大学OBの支援により遊具を寄贈し、その後も運動会、豆まき、スキー体験活動の支援、交流事業を継続して行っており、2022年度も富岡小・中学校の運動会の支援を行っている（写真1-8-1-3）。

2019年度からは6団体交流会を開催し、情報共有や団体間の連携を深める活動も行っている。これらの活動は毎年活動報告をHPで公開している（<https://www.chiba-u.ac.jp/volunteer-center/event.html>）。

(1) 学生ボランティア支援団体 C-vol（シーボル）

学生ボランティア支援団体C-volは、2009年4月の「ふれあいの環」学生総合支援センター創設と同時に立ち上がった。活動開始以来、ボランティアに携わりたい学生や教職員のサポートを目的とし、ボランティア情報の発信、ボランティア未経験者のサポート、各種ボランティアの企画・運営を行ってきた。2011年の東日本大震災から月日が経つにつれて、ボランティア活動も震災ボランティアだけではなく、幅広い活動が行われるようになり、日頃のボランティア相談や報告会をはじめ、千葉市少年自然の家でのボランティア活動や、千葉市の広域避難場所である千葉大学サッカー・ラグビー場（西千葉キャンパス）で、地域子どもたちとキャンプに必要な技術を学びながら防災について考える「ちばシティサバイバルキャンプ



写真1-8-1-2 震災支援ボランティア（2011年）



写真1-8-1-3 富岡小・中学校（合同）運動会



写真1-8-1-4 ちばシティサバイバルキャンプ



写真1-8-1-5
台風15号の被害に伴うボランティア（2019年）

（CCSC）」の開催など、様々な活動を行っている（写真1-8-1-4）。2019年房総半島に大きな被害のあった台風15号の後には、災害ボランティアに駆けつけ（写真1-8-1-5）、2020年以降の新型コロナウイルス感染拡大により対面での活動が難しくなった時期には、オンラインによるCCSCを企画・実施するなど、ボランティアの草の根を絶やさぬよう活動を継続してきている。

（2）学生コミュニティ支援団体 GCAP（ジーキャップ）

学生コミュニティ支援団体GCAPは、2009年4月の「ふれあいの環」学生総合支援センター創設当初に「なんでも相談室」を開室し、同じ学生の立場から学生相談を受ける活動を行ってきた（当時の団体名称は「ピア・カウンセラー」。現在は、新入生を対象とした「新入生サポート会」を毎年4月に開催し、大学に入って何をすべき

かわからない新入生から履修方法等の相談を受けている。

また、学部・学年を超えたつながりの場をつくり、話し合える環境や居場所を提供することを目的として、1つのテーマについて参加者が自由に語り合う「カタリベカフェ」の企画・運営を2009年から継続して行っている（写真1-8-1-6）。



写真1-8-1-6 カタリベカフェの様子

(3) チャレンジド・サポートみのり

2018年度から「ふれあいの環」に加入したチャレンジド・サポートみのりは、身体に障害を持ち、車椅子等を利用する学生が、「みのり多き学生生活」を送れるよう支援しており、車椅子使用者の移動や授業参加の支援、障害の理解促進のための広報・啓発活動（車椅子講習会の開催、学内バリアフリーマップの作成等）を行っている（写真1-8-1-7）。



写真1-8-1-7 バリアフリーマップ作成の様子

(4) ノートテイク会

ノートテイク会は、1995年から手話サークル「ウルトラマンの会」の有志の学生が自主的に無償ボランティアとして聴覚障害学生の支援を開始したことに端を発し、2000年に任意団体としての「千葉大学ノートテイク会」が設立された。その後、2009年4月の「ふれあいの環」総合学生支援センター創設時に1団体として加わり、現在も聴覚障害学生の情報保障のため活動を行っている。



写真1-8-1-8 ノートテイク練習会

主な活動として、授業の際に音声情報をPC入力または手書きで文字に起こしたものを聴覚障害学生に提供する「ノートテイク支援」を行っている。2020年以降の新型コロナウイルス感染拡大により、対面授業及びノートテイク支援が困難になった際は、メディア授業の音声データや動画を文字起こしし、聴覚障害学生へ提供することで支援を継続した。



写真1-8-1-9 入学式における字幕通訳

2022年現在は18名の学生が支援者（ノートテイカー）として在籍しており、定期的な練習会等で必要な技術を習得した上で授業（年間約465時間）における支援を行っている。

また、受講時の支援以外にも入学式、卒業式及び「千葉大学Universal Festival」（千葉大学国際教育センター主催）における字幕通訳のほか、「日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク及び筑波技術大学主催）におけるパネル展示等の活動により情報共有・発信を行っている。

(5) 学生キャリア支援団体 career port（キャリア ポート）

学生の自立的キャリアアップを支援し、ともに学びあいながらキャリアを形成していくことを目的としている。就活生に限らず、全ての千葉大生に自己のキャリアや人生、価値観について考える機会を提供することを目的に活動している。主な活動として、「朝チバ!」、「学チカ会」、ビジネスコンテストへの参加がある。

「朝チバ!」では「午前中を活動的に」をモットーに週に1度、大学の1時限の時間帯に参加者をオンラインでつなぎ、オンライン自習室のような空間を設定している（写真1-8-1-10）。何も予定がなければ寝て過ごしてしまいがちな午前中でも、朝から集中して作業や勉強を行うことで有意義な1日を送ることができている。



写真1-8-1-10 「朝チバ!」の様子

「学チカ会」では、月に1度、自分が今努力していること、努力したいことについて考え、話す機会を設けている。自分の目標や現状、問題点を明らかにした上で、問題やその原因、どのように解決していくのかを分析・宣言している。目標に向かって共に頑張る仲間を得られたり、アドバイスをもらえたりする機会になっている。

2020年度から、千葉県インターンシップ推進委員会が主催するビジネスコンテスト「千葉限定キャリアインカレ」への出場者を学内から募っている。ビジネスコンテストでは、企業が提示する課題に対する解決策をチームで考え、そのアイデアの出来栄を競っている。2020年度の大会では千葉県内の大学から全49チームが参加し、決勝大会に進出可能な6チームに、千葉大学の2チームが選出された。2021年度の大会では1チームが決勝大会に進出、全40チームの参加の中で、見事優勝を飾っ

た(写真1-8-1-11)。本コンテストに参加することで、ビジネスにおいて重要な企画提案力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などを養うことができている。

上記の活動のほかに、自己啓発本の内容について学び合う「読書会」、キャリア支援NPO法人en-courageと合同企画した就活生支援イベントなども行っている。また、過去には抽象的なものについて学生同士で語り合う「哲学対話」、社会問題などをテーマに知識を得たり議論をしたりする「月間キャリアポ」、自分のなりたい将来像を考え、そこに到達するための自己投資を考える「自己投資イベント」なども行ってきた。

(6) CISG (シーアイエスジー) —国際学生会—

CISG (Chiba university International Student Group) は、「ふれあいの環」が生まれた2009年をさらに遡る1995年に、千葉大学留学生センター指導相談部門(当時)が立ち上げた学生団体である。日本人学生が留学生と相互に協力し、様々な企画を実施するなかで、相互理解、多文化理解を深めていく教育的な側面を重視し、センターが直接指導する体制を取った(現在でも、留学生センターの後継部局である国際教育センターの下部組織として存在する形を取っており、学生が自主的に作り、学生支援課が管轄する「課外活動団体(サークル)」とは性格を異にしている)。

具体的な活動としては、①4月、10月の留学生来日時の入寮手伝い、稲毛・西千葉ツアーの開催、区役所等の手続き補助、②新入留学生歓迎会、③年2回おこなっている「千葉大学ユニバーサルフェスティバル(留学生による自国文化紹介)」の企画運営、④授業期間に週一度程度実施している「チャットルーム(日本語で話す会)」などがある。また団体としての活動ではないが、メンバーの有志に留学生チューターを依頼することも多い。

①はCISGによる独自企画と留学



写真1-8-1-11
2021年度キャリアインカレ優勝チーム



写真1-8-1-12 ウェルカムパーティー

生課をサポートする面とに分かれるが、いずれにしても直接的な支援の場として、②は相互理解の端緒の場として、さらに③、④はそれを深化させる場としての位置付けがなされ、それぞれ所期の目的を果たしている。

とりわけ、「千葉大学ユニバーサルフェスティバル」(UF)は1995年6月に第1回を開始したのち、2022年12月で61回目の開催となる息の長い企画となっている。現在は年2回の実施が定着し、複数の国が発表するのが、常となっているが、61回までに出演を果たした国・地域は、63にもものぼる(最多出場はインドネシアの21回、次いで韓国の16回である)。



写真1-8-1-13
千葉大学ユニバーサルフェスティバル

学外の一般市民(中高生含む)も参加できる形にしており、学内外から多い時は200名近くが参集する。そのため、このフェスティバルの実施意義の1つとして、地域社会の国際理解への貢献もあげられるが、本来の企画意図として、留学生の生の声を伝える「場」の提供、留学生と日本人学生の協働作業に成果を見るなどの評価が与えられる。また、この企画に参加した日本人学生が派遣留学への意識を高めた事例も少なくない。

2020年度から、本学は「全員留学」を打ち出したが、折からの新型コロナウイルス感染拡大により、海外との人的交流ができない状態に陥った。2020年前期は、UFを含め、CISGの活動も完全にストップしたが、同年後期と2021年度2回、計3回のUFは、オンラインで実施し、また、2022年度は対面での活動を再開した(見城「千葉大学ユニバーサルフェスティバル60回のあゆみ」『千葉大学国際教養学研究』7号、2023年)。

今後、社会全体がコロナ前の「日常」を取り戻していくことに向け、CISGの活動は、来日した留学生を支援するだけでなく、日本人を海外に送り出す端緒としての役割もますます期待される場所である。

なお、2007年3月には、学長からCISGに対し、「課外活動賞」が授与されたことも付記しておきたい。

第4項 課外活動

(1) 課外活動施設

2022年時点では、西千葉地区の体育施設・課外活動施設として、陸上競技場、サッカー・ラグビー場、テニスコート（6面）、多目的コート（テニス・バレー）（4面）、野球場、プール（50m 8コース）、ゴルフ練習場、第1体育館、第2体育館、武道場（剣道場、柔道場）、ダンス場、弓道場、サークル会館（文化系、体育系、音楽棟）、その他体育管理施設等がある。



写真1-8-1-14
サッカー・ラグビー場（2013年度改修）

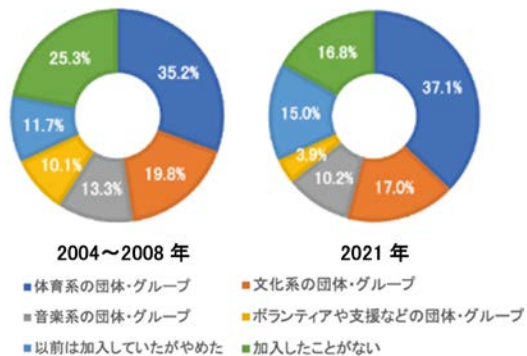
2013年度にはサッカー・ラグビー場の人工芝化工事を行うとともに、周辺にベンチ兼用の防災トイレや照明等を設置し、災害時の機能向上を図った（写真1-8-1-14）。竣工式にはJリーグジェフユナイテッド市原・千葉ユースの選手を招いて、本学体育会サッカー部と記念試合を行った。

(2) 課外活動

a. 団体数・コロナ禍の活動・成績

課外活動は、学生の自主性のもと、勉学・研究と両立しつつ、貴重な人間関係を築き、多くの社会的経験を積んでいくことを目的として開学当初から継続して行われてきている。そして、自己規律性や協調性、指導力などが養われる貴重な場として、また、充実した学生生活を過ごすための場として存在してきた。『千葉大学三十

図1-8-1-9 サークル活動



年史』、『千葉大学五十年史』（以下「三十年史」、「五十年史」）には多くの変遷が示されており、「三十年史」によると、1949（昭和24）年5月には1サークルもなかったところから次々にサークルが結成されていき、1960（昭和35）年には稲毛地区学生自治会に文化部協議会34サークル、運動部協議会22サークルが存在し、その他、各学部自治会にサークルが存在し、合わせて109のサークルがあった記録が残っている（「三十年史」、p.1145）。「五十年史」に示されている団体数をみると、1978年に西千葉地区で活動している公認サークルは体育系50団体、文化系79団体、計129団体、1997年には体育会部活動42団体、体育系44団体、文化系73団体、音楽系18団体、計177団体となっている（「五十年史」、p.921）。

現在は、体育会部活動46団体、体育系サークル31団体、文化系サークル42団体、音楽系サークル19団体、亥鼻全学サークル30団体の168団体となっている（2022年3月現在）。

現在は、体育会部活動46団体、体育系サークル31団体、文化系サークル42団体、音楽系サークル19団体、亥鼻全学サークル30団体の168団体となっている（2022年3月現在）。

学生のサークルへの参加状況について、2004年～2008年の学生生活実態調査と2012年～2021年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」におけるサークルへの加入状況によると、体育系のサークルが30%台、文化系、音楽系サークルが30%台、サークルに参加したことがない、以前は加入していたがやめた、が合わせて30%台とこの2つの時期において、大きく変わっていないことを示している（図1-8-1-11）。「五十年史」に示された1980年～1997年の体育会・サークルの人数と比較しても大きな傾向は同様であることがうかがえる。2012年～2021年「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」から体育会・体育系サークル、文化・音楽系サークル、サークルに所属していない学生の10年間の推移をみると、体育会・体育系サークルに所属していた学生は

図1-8-1-10
体育会・サークル参加人数の割合（1980-1997）

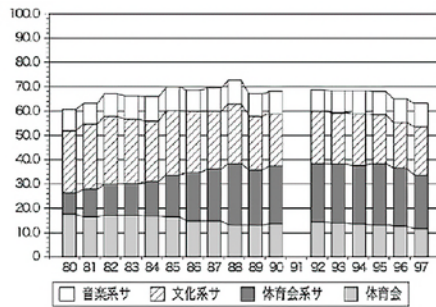
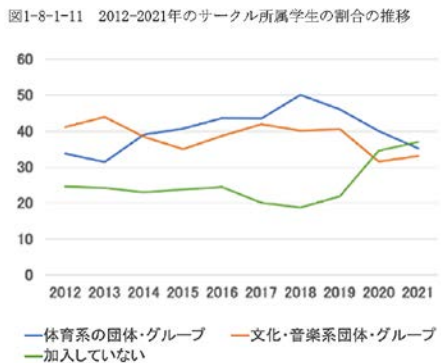


図1-8-1-11
2012-2021年のサークル所属学生の割合の推移



2010年代前半、増加傾向を示していたが、2010年代後半減少に転じたことが示されている。2020年はコロナウイルス感染拡大の影響で4月にキャンパスが閉鎖され、10月の全面解除まで活動が中止もしくは制限された。その後もこの影響を受け、2020年、2021年と加入していない学生が増加したが、2022年より徐々に活動が戻りつつある。

b. 学長表彰

1994年から課外活動や人命救助、ボランティア活動等において優れた成績を収めた学生を表彰する学長表彰課外活動賞が設けられた。スポーツ・文化・芸術サークルの大会・競技会での優秀な成績、国内外で行われたコンペティションでの優秀賞などの受賞、人命救助など優れたボランティア活動をした団体・個人が表彰された。

(https://www.chiba-u.ac.jp/campus-life/commendation/commendation_02.html)

c. 2020東京オリンピック・パラリンピック

2013年9月に国際オリンピック委員会総会で2020年オリンピック・パラリンピックが東京で開催されることが決定した。この東京オリンピック・パラリンピックもコロナウイルスの感染拡大の影響を受けて1年遅れ、それぞれ、2021年7月23日～8



写真1-8-1-15 長島理選手



写真1-8-1-16 パラリンピック普及活動

月8日、2021年8月24日～9月5日に開催された。千葉市の幕張メッセで、フェンシング、テコンドー、レスリングのオリンピック3競技とゴールボール、シッティングバレーボール、テコンドー、車いすフェンシングのパラリンピック4競技が行われた。千葉県一宮町釣ヶ崎海岸サーフィンビーチでサーフィンが行われた。パラリンピックバドミントンWH1クラス男子シングルスには千葉大学工学部卒業の長島理選手が出場し、5位入賞を果たした。2012年教育学部卒業の小泉智貴氏は、歌手のMISIAが国歌独唱で着用したドレスのデザイン及び制作を担当した。在籍していた学生では、聖火ランナーとして人文公共学府博士後期課程に在籍する都築則彦氏が



写真1-8-1-17 切手モザイクアート

松戸市の聖火ランナートーチキスに参加した。教員では、大学院国際学術研究院の山口智志准教授がオリンピックスケートボード会場の医療ボランティアとして参加した。正確な人数は把握できていないが100名以上の学生、卒業生がボランティア等で関わったとみられる。正確な人数がわかるものとしては、幕張メッセで行われた車い

すフェンシングは学内でボランティアを募集し、募集の段階では60名程度の学生が参加申し込みを行なっている。このボランティアについても1年延期されたことにより参加を断念した学生もみられたが、8月25日～29日に開催された車いすフェンシングでは37名以上の学生がボランティアとして活動した。開催が決定してから、千葉大学ではパラスポーツに対する理解の促進や競技人口の増加を測ることも目指して、パラスポーツに関するイベントや教育・普及活動を行ってきた。日本郵便株式会社と千葉大学との共同プロジェクト・切手モザイクアートで、千葉県で開催されるパラリンピック競技3種目を制作し、成田空港等に展示し、普及活動だけでなくパラリンピックを通じた地域交流等にも貢献した（写真1-8-1-17）。パラリンピック種目における地域交流は2021年のオリンピック・パラリンピック後も継続しており、オリンピックのレガシーとなっている。

(3) 主な諸行事

a. 関東甲信越大学体育大会

関東甲信越大学体育大会は、1952年茨城大学の当番で始まり、千葉大学は第1回大会から毎回参加している（「三十年史」）。千葉大学は第5回（1956年）、第14回（1965年）、第24回（1975年）、第33回（1984年）、第42回（1993年）大会でそれぞれ当番大学を引き受け、千葉市を中心に県下の施設を使って大会を開催した。その後、関東甲信越大学体育大会は、1997年第46回大会から3大学が当番大学となる分担方式となり、千葉大学は第51回（2002年）、第66回（2017年）大会を主管大学として担当している。その他、4大会において当番大学を務めている。また、第61回（2011年）大会は東日本大震災のため中止となり、第69回（2020年）大会は東京オリンピック・パラリンピック開催のため中止の予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大によりオリンピック・パラリンピックも延期となり、大会も予定通り中止、第

70回（2021年）大会は新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。現在は本学を含む13大学を構成員として、当番大学を定め、毎年8月に開催されている。17競技30種目を学内及び県内の施設を使用して実施している。2000年以降、千葉大学が優勝した種目は、男女テニス、バドミントン男女、準硬式野球、弓道男女（2003年～2005年3年連続優勝）、水泳男女（女子は2007年～2014年8年連続優勝、2011年は非公式大会ながら自主開催し優勝）、空手道（防具組手で2009年に優勝）である。2023年は本学が当番大学となり8月15日～31日の日程で行われ、硬式野球、柔道、ラグビー、男子テニスで千葉大学が優勝した。

b. 大学祭

千葉大学の大学祭は、現在、西千葉地区（千葉大祭）、亥鼻地区（みのはな祭）、松



写真1-8-1-18 大学祭（模擬店）



写真1-8-1-19 大学祭（ステージ）



写真1-8-1-20 亥鼻祭オンライン

戸地区（戸定祭）の3地区で、学生により組織された大学祭実行委員会が中心となり行われている。また、2004年から大学祭最終日に合わせて柏キャンパスでセンター祭が行われている。「三十年史」、「五十年史」によると1963年11月に第1回千葉大学祭が行われたが、1952年に稲毛祭として始まった学部祭を発展させて行われた。そして、この時から学生の手による自主的な行事として定着し、現在に繋がっている。「三十年史」によると、1977年に大学祭の日程が短縮されたことが記されており、「五十年史」には毎年11月1日から4日の4日間開催されていたことが報告されている。近年は11月初旬の週末に実施されている。第54回（2016年）千葉大祭から、4日間開催に変更はないが、片付け、撤収の時間を考慮し、最終日の終了時間が15:00に短縮されている。また、ターム制等の導入により、授業日程がタイトになったこと、千葉大祭は地域に親しまれ、多く



写真1-8-1-21 戸定祭ステージ

の一般参加者があり平日よりも週末に賑わいをみせることから、2020年度から金・土・日の3日間開催に変更することが決まっていた。しかし、コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年、2021年の千葉大祭は中止となり、2022年から3日間開催で実施された。「三十年史」によると、千葉大学祭は1964年の第2回大会から大学祭にテーマが必要か調査・議論を行った上で、テーマの必要性が求められ、以降毎年スローガンを立てた上で実施されている。2022年第60回のテーマは「＃＋START!」というテーマで、中止になってしまった過去2回を糧にパワーアップした千葉大祭にしようという気持ちを込め、一般来場者入場制限なし、飲食販売も実施とほぼ例年に近い状態で開催された。近年は、テント企画（模擬店）、部屋企画、ステージ企画、ストリートパフォーマンス、自由企画と多様な企画が行われているが、お祭りの企画が主となってきている。また、亥鼻祭については、2020年度、12月5、6日にオンライン（写真1-8-1-20）で開催し、亥鼻祭実行委員会が課外活動における学長表彰を受賞している。オンラインツールにて講演会を実施したほか、受験生と学生が1対1で語らう受験相談の場を設けた。また、仮想現実のキャンパスを設置し、各課外活動団体の活動成果発表の場を設け、対面での大学祭さながら盛況を見せた。

c. サークル・リーダーシップトレーニング研修会

サークル・リーダーシップトレーニング研修会は、集団研修を通じて健全な課外活動のあり方を理解させ、あわせてリーダーシップの養成を図るとともにサークル活動の質的向上に資することを目的に1976年度から実施された。当初は体育会系サークルを中心に宿泊を伴った研修が行われていたが、1996年度から文化系及び音楽系サークルを含め行われるようになった。ところが、参加するサークル数の減少、宿泊研修の負担などにより、2008～2012年度の5年間は開催されなかった。しかし、サークル活動における安全対策（危険防止）、コミュニケーション能力向上など、リーダーとしてのふるまいを学ぶ機会を持つことはサークルを円滑に運営していく上で大変重要であるということから、2013年度から研修方法を変更し、キャンパス内で半日集中研修として再開した。研修の内容は、安全講習（アルコールハラスメント・急性アルコール中毒について、SNS等の利用について）、リーダーに必要な6つの習慣、グ

ループワークとし、外部講師による講習も交えて行っている。2018年度からSNS等に関する情報セキュリティーについては千葉県警からも協力を得ながら講習を行っている。2013年度は西千葉キャンパスのみで年1回研修を行っていたが、2014年度からは2月に西千葉キャンパスで、3月に亥鼻キャンパスで年2回実施するようにし、公認サークルはすべてリーダーシップトレーニング研修会に参加し、安全・円滑な活動ができるように研修の機会を提供している。2020年度はコロナ感染拡大の影響も考慮し、オンラインでの研修を行い、2021年度は感染対策を行った上で、午前・午後にわけた対面開催としたため参加率が低下し、西千葉公認サークルの参加率が71.9%、亥鼻全学サークルの参加率が60.0%とコロナウイルス感染拡大前と比較して低くなっていた。詳細な分析は行えていないが、毎年、研修会後の振り返りにおいて、参加した各サークルのリーダーからは肯定的な感想が多く、サークルの安全・円滑な運営のために役立っていることがうかがえる。

第5項 学生相談・障害者支援

(1) 学生相談室の沿革

1978年に保健管理センター内に医療部門と共に学生相談室が設けられ、うつ病などメンタル面の相談に対応していたが、文部省高等教育局（当時）から、「大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して—」（通称：廣中レポート）が出された翌年の2001年に、多様化した学生のニーズに対応するため、西千葉地区福利厚生施設のスペースを利用して学生支援室（なんでも相談）を設置した。

2004年に松戸地区の緑風会館1階、2005年に亥鼻地区の看護・医薬系総合教育研究棟1階にそれぞれ学生相談室を設置し、各キャンパスに相談室が整備された。

2010年に西千葉地区の学生支援室を学生相談室に改称するとともに、発達障害等を抱えた学生を支援する部門を設置した。

2023年には総合安全衛生管理機構を再編し、同機構相談支援部の下に学生相談室を位置付けることにより、増加しているメンタルヘルスの不調、各種疾患及び障害等への支援体制を一元化し、修学環境の改善を図っている。

なお、西千葉地区学生相談室（学生支援室）は2005年に学生支援プラザへ、松戸地区学生相談室は2019年に園芸学部F棟2階へ移転している。

(2) 学生相談室の概要

学生相談室は、前身の学生支援室の支援体制を引継ぎ、「なんでも相談」として、学生相談室長のもと、心理カウンセラー（臨床心理士等の有資格者）が学生、保護者、教職員等からの幅広い相談に対応している。近年では学生の抱える問題も多様化・複雑化しており、2016年には「障害者差別解消法」が施行され、障害を理由とする不当な差別的取扱いの禁止や合理的配慮の提供などが義務付けられている。

学生相談室は、一般的な相談対応（教職員等と学生の間に入っての調整を含む）のほか、教職員へのコンサルテーション、FD・SDの実施、オムニバス形式の授業（普遍教育）における講義、広報活動、各種カンファレンス（学生相談室内の事例報告、障害者支援部教員及び総合安全衛生管理機構医師等との情報共有等）なども行っている。

a. 学生相談室の運営体制

2002年に学生相談委員長（教員）、学生相談員（教員）2名、グランドフェロー（元教員）1名、事務職員1名の体制で学生相談を開始した。2009年にカウンセラー（特任専門職員）を採用、その後増員し、2023年現在は学生相談室長（教員）及びカウンセラー（特任専門員及び特任専門職員）5名を中心に運営している。

b. 開室日時

- ・西千葉キャンパス 月曜日～金曜日 9：00～17：00
- ・亥鼻キャンパス 毎週月曜日、第1・3木曜日、第2・4金曜日
9：00～17：00
- ・松戸キャンパス 第1・3金曜日 9：00～17：00

※祝日、夏季一斉休業及び年末年始は閉室



写真1-8-1-22 西千葉地区学生相談室（学生支援ブラザ）

おわりに

学生生活についてまとめると、2000年から2020年にかけて、学生が全国から入学していることには変わりはないが、関東近辺の学生については、自宅から通う学生の割合が増加傾向にある。家賃、アルバイト等の生活面については、大きな変化はみられないが、南関東に位置していることもあり、収入及び支出は全国的な平均よりも多少多い傾向にある。

学生支援に関する大きな変化は、「ふれあいの環」学生総合支援センターの創設である。学生・教職員、そして地域住民が協同して多面的な活動ができる場ができたことは大きな成果である。

そして、何より東日本大震災、コロナウイルス感染拡大という大きな災害に見舞われたことが大きく、学生生活にも多大なる影響を与えた。入学式、卒業式、大学祭をはじめ、課外活動の大きな行事が中止となり、これまで当たり前存在していたものが大きく変わってしまった時期であった。学生にとっては、つらい、厳しい学生生活を送らざるを得なくなったことは想像に難くない。しかし、オンラインによる活動が急激に発展し、オンラインによる亥鼻祭も行われた。今後は、このような活動も取り込みながら、学生がより充実したキャンパスライフを送れることを期待したい。

第2節 卒業生との連携

第1項 千葉大学校友会

(1) 校友会の設立

本学における全学同窓会の設立は、1999（平成11）年頃、磯野可一学長によって構想された。国立大学の法人化を目前にし、既に強大な同窓会組織を有す都内私立大学と伍していくため、「大学の内外の団結を強力に進める必要」を痛感していたという。2年後の2001（平成13）年9月に準備委員会が正式に発足し、10月の役員会において「千葉大学校友会」の設立が決定した。この間、会則（案）や組織体制が検討された。

2002（平成14）年3月1日の校友会設立総会（於・幕張プリンスホテル）において、全て原案の通り承認され、全国の国立総合大学に先駆け、全学同窓会組織「千葉大学校友会」が設立された（『千葉大学校友会誌 2001-2004』2005年3月）。